



Title	「私」であることの2つの基準について：認知文法の観点から
Author(s)	田中， 太一
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 44-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95374
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「私」であることの2つの基準について：認知文法の観点から

田中 太一

1. はじめに

「私」や I のような一人称（単数）表現の典型的な使用は、概念化の主体である話し手自身を概念化の客体としても把握し、表現するという点で、他の多くの言語表現とは異なる特徴を持つ¹。本稿では一人称（表現）の意味について、認知文法の観点から論じ、その根本には「内容による同定」と「同定に先立つ現実性」の2つの基準が働いていることを示す²。

2節では、概念化の主体と概念化の客体という、認識における非対称性を導入する。3節ではそれを踏まえ、もっぱら概念化の客体として捉えられる対象を一人称によって指示する表現を「内容による同定」の観点から分析する。続く4節では、概念化の主体である話し手自身を一人称によって指示する表現を、話し手・聞き手の役割の二重性の観点から検討する。5節では、人称表現の意味を分析するうえで不可欠な観点である「同定に先立つ現実性」について説明する。6節では結論として、一人称表現の使用においては「内容による同定」と「同定に先立つ現実性」がともに働いていると主張する。7節はまとめである。

2. 認識の非対称性

私（たち）が何かを見るとき、その注意は見られている対象へと向かうのであって、見る主体へと向かうのではない。私が目の前のペットボトルを見るときには、まさにペットボトルを見ているのであって、ペットボトルを見ている私を見ているのではない³。ただしこの場合であっても、ペットボトルが見えるという事態は、認識主体である私の関与なしには成立しえない。私がそこに存在し、ペットボトルを見ているからこそ、ペットボトルが見えるのである。認識にはこのような役割の非対称性がある。認知文法では、認識において注意が向けられる対象は、「客体」として捉えられており、その認識を構成する主体は、「主体」として捉えられていると考えている。

客体と主体の境界は概ね安定しているものの、Langacker (1990: 1 節) が眼鏡を例に説明するように、一定の揺れを含むものである。主体が眼鏡を掛けているとき、通常はその眼鏡自体が客体として捉えられることはなく、眼鏡を通して見ている対象が客体として捉えられる。一方で、眼鏡を手にとって観察する場合には、その眼鏡が客体として捉えられることになる。人間の認識・知覚に関わる器官は（少なくとも日常的には）このように取り外して観察することはできないため、典型的には主体として（のみ）捉えられているが、何らかの異常が生じた場合には、そこに注意が向かい、客体として（も）捉えられることになる。この点については、大森（1982 [2021]）の次の記述が参考になる。

- (1) 水晶体が白濁する白内障にあっては外部風景（臉を含めて）が霞んで見える。明らかに、われわれは水晶体を「見透し」てその向うをみているのである。ただ健康な眼ではそれは清澄な空気と同じく「透明」なのである。[中略] 自分の眼は見ること

ができない、とよく言われるがそれは大間違いである。私は常時私の眼のど真中を見透しているのである。
(大森 1982: 133 [2021: 184])

私（たち）の視覚には常に水晶体が（通常それ自体は注意の対象とはならない）主体として関与している。そして、濁りが生じ、それによって視野に欠損が生じたり、視界がぼやけたりした場合には、その濁りを眼球の内に存在する客体として捉えることになるのである⁴。

また、客体として捉えられる対象は、認知主体（とみなされる個体）の外側にのみ存在するわけではないという点に注意が必要である。Langacker (1990: 1 節) が述べるように、感情は主体として捉えられることが多いが、反省的に意識が向けられる際には客体として捉えられる。身体部位に弱い痛みが生じた場合には通常、「頭が痛い」「頭が痛む」のように、主体自身の身体の一部に生じた事象として客体的に捉えられ、他者からどこが痛むのか聞かれれば、頭を指さして答えることも可能である。一方で、全身に強い痛みが生じる場合には、その痛みを客体として捉えることは難しく、むしろあらゆる対象が、主体として把握されたその痛みのもとで（すなわち、その痛みを通じて）捉えられることになるだろう。

認知文法では、言語表現は認知主体の概念化を反映していると考えている。話し手・聞き手のコミュニケーションが、言語記号（の意味）を介して、それによって適切にカテゴリー化できる対象へと共同で注意を向ける過程だとするならば、言語によって指示される対象は、話し手・聞き手にとって、客体として捉えられているのでなければならない。言語使用における指示とは、（場合によっては具体的な指差しを伴う）概念的指示であり、私たちは客体として捉えられていない対象を指示することはできないのである（これはつまり、ある対象に注目しないことと、注目することを同時には行えないということである）。

一人称表現は、典型的には見られる側ではなく見る側、つまり主体として捉えられる個体を指示する記号である。しかし、概念化の主体である人間は、自分自身を直接に観察することはできない。視界に収まる範囲をどれだけ注意深く観察しても、目に見えるのはせいぜい身体の一部でしかない⁵。私（たち）が一人称表現を用いる際には何が起きているのだろうか。

3. 概念化の主体以外を指す「私」

一人称の使用として最も典型的なものではないが、まず話し手が観察可能な対象を指す用法を検討する。(2) は写真を見ながら説明している状況での発話であり、(4) の二文目は話し手が映画において演じる役についての発話である。それぞれの日本語訳である (3)・(5) でも、一人称を同様に用いることができる。

(2) That's me in the middle of the top row. (Langacker 1985: 129)

(3) 上の列の真ん中が私です。

(4) In my next movie I play a double-agent. Both the CIA and the KGB are trying to kill me.

(Langacker 1985: 129)

(5) 次の映画で演じる役は二重スパイなんだ。CIA と KGB の両方が私の命を狙ってい

るんだよ。

このような使用における私は、主体として捉えられている話し手自身ではなく、あくまで写真や映画に現れ、客体として捉えられる対象を指示している。しかしながらこれらは、「このコップ」や「あの本」などの通常の指示表現とは異なる。なぜなら、この場合に一人称を用いるためには、話し手（・聞き手）は、「私」で指示される対象が、何らかの意味で話し手と同一であると見なしていなければならないからである。仮に、(3)の話し手が山田太郎であり、そして山田太郎は山田太郎が写真上列の真ん中にいるということを知っていたとしても、自身が山田太郎であることを（何らかの事情によって）知らなければ、「上の列の真ん中が山田太郎です。」とは言うだろうが、(3)のようには言わないだろう。

Langacker (1985: 129) はこの種の例に対して、(写真と現実、映画と現実など) 2つの世界が関わっている点を捉え *cross-world identification* というラベルを与えている。このような「世界をまたいだ同一性」は、(2)～(5)のように身体的な連続性に支えられている事例以外にも考えられる。たとえば、現実には起こった出来事を題材にした映画を関係者が視聴し、自分自身に相当する登場人物に気づいた場合、そのことを(6)のように表現することができる。

(6) あっ、私が出てきた。

この場合には、スクリーン上に映るのは役者の身体であって、話し手自身の身体ではないが、一人称表現「私」の使用は極めて自然である。

また、概念化主体にとって直接観察可能な対象を一人称によって指す用法は、複数の世界に関わるものに限定されるわけではない。次の状況を想定されたい。私（著者である田中）が帰宅し、部屋に不審な気配を感じる。警戒しつつ周囲を見渡してみると、そこに自身と瓜二つの人物（つまり、外見上は（そして、観察可能な限りにおいて内面も）完全に田中であるような人物）が立っていた。慌てて逃げ出した私は、警察に次のように伝える。

(7) 家に帰ったら、私がいたんです。

このとき、主体として捉えられている話し手も、客体として捉えられている対象のどちらも現実世界に存在するが、「私」はやはり、もっぱら客体として捉えられている。

一人称表現にはこのように、何らかの内容に基づく話し手自身との同一性を有する個体を指示する用法がある。Langacker (1985) による *cross-world identification* という特徴付けは、現実世界においては普通、そのような個体は自分自身しか存在しないという経験的事実を反映したものと考えられる。しかし、話し手自身が属するのとは別の（写真や映画などの）世界に関わることは、そのような対象と出会うための条件であって、その対象を一人称表現によって指示するための条件ではない。もっぱら客体として捉えられた対象が「私」によって指示される際には、その対象が、話し手と何らかの意味で同一であることが重要なのである。

その際には同一性の基準として、「私は〇〇という名前であり、△△な容姿をしており、××高校出身であり……」という主体が有する属性が用いられている。以下ではこの種の基準を用いてある個体を一人称によって指示可能な対象として捉える過程を、「内容による同定」と呼ぶ⁶。次節で見るように、内容による同定は、「私」の最も典型的な用法、すなわち概念化の主体としても捉えられている話し手自身を指示する用法においても同様に働いている。

4. 概念化の主体を指す「私」

一人称表現の典型的な使用において概念化の主体が指示するのは、まさに概念化の主体自身である。しかし、2 節で確認したように、主体にとって自分自身は直接観察可能な客体ではない。私たちはどのようにして、主体として把握された自分自身を客体として把握し、指示するのだろうか。Langacker (2007) は典型的な会話が持つ特徴、および他者という対象の概念化に注目し、一人称代名詞および二人称代名詞の意味を説明している。以下では、その分析を（例や議論を付け足しつつ）簡単に紹介する。

典型的な会話は、二人の会話参加者が話し手・聞き手という役割を交代しながら進んでいく。会話参加者が太郎と花子だとすると、太郎が話し手、花子が聞き手である発話が生じた後に、花子が聞き手、太郎が話し手である発話が生じ、そしてまた太郎が話し手、花子が聞き手である発話が生じ……というふうに役割を交代しながら続いていくということである。このような交代は慣習化したものであるため、話し手は潜在的な聞き手としても、聞き手は潜在的な話し手としても捉えられるようになっていく。

概念化の主体と概念化の客体という役割もまた、同種の二重性を有する。ある主体が別の主体を客体として捉える際には通常、その客体として捉えられた主体から、自身が客体として捉えられる可能性を踏まえている。再び太郎と花子を例に説明すると、太郎が花子を客体として捉える際には、主体としての花子にとっては、自身（太郎）が客体として捉えられることを理解しており、反対に、花子が太郎を客体として捉える際には、主体としての太郎にとっては、自身（花子）が客体として捉えられることを理解しているということである。このようにして、概念化の主体は潜在的な概念化の客体でもあり、概念化の客体は潜在的な概念化の主体でもあることになる。

このような役割交代を踏まえた概念化は複雑なものと感じられるかもしれないが、言語の主な機能が2 節で述べた意味でのコミュニケーション、すなわち話し手・聞き手が、言語記号（の意味）を介して、それによって適切にカテゴリー化できる対象へと共同で注意を向ける過程であることからすれば、自然なものとして理解できる。話し手と聞き手が注意を調整し合うためには、話し手は聞き手の信念状態を一定程度把握し、聞き手もまた、そのような話し手の信念状態を把握している（し、話し手はそうように聞き手が把握していることも把握し、また聞き手は話し手がそのような把握を有していることをも把握し……）という関係が成立していなければならない（cf. Scott-Phillips 2014）。

これらのことを踏まえ、まず、話し手にとっての二人称代名詞は、（潜在的な聞き手である）話し手に対して、（潜在的な話し手である）聞き手かつ（潜在的な概念化の主体である）概念化の客体である対象を意味するものであると分析される。これだけのことであれば、潜在的

な話し手や潜在的な概念化の主体を持ち出さなくとも、会話における聞き手というように規定して済ませてしまうこともできるように思われるかもしれない。しかし、一人称代名詞の場合には事情が異なる。すでに述べたように、概念化の主体にとって、当の主体自身は直接的な観察の対象とはならない。そのため(潜在的な聞き手である)話し手は、(潜在的な話し手である)聞き手による概念化を参照し、そこにおける客体である自身を指し示す必要がある。簡単に言えば、「私」とは「あなたにとってのあなた(相手の相手)」だということである⁷。

Langacker(2007)では明示的に説明されているわけではないが、以上の議論は、聞き手にとっての、一人称代名詞・二人称代名詞の意味を理解するうえでも有益である⁸。まずは、一人称代名詞から考えてみよう。話し手から見た場合と異なり、聞き手にとっては話し手が直接的な観察の対象(概念化の客体)になっている。そのため、一人称代名詞は、聞き手に対して、話し手かつ概念化の客体である対象を意味すると考えられる。これはつまり、誰であれ話し手が一人称代名詞を用いた場合には、(直接引用などでなければ)その主体自身を指すということである。では、二人称代名詞はどのように分析できるだろうか。聞き手にとって、聞き手自身は直接的な観察の対象とはならない。そのため、聞き手は話し手による概念化を参照し、そこにおける客体である自身へと注意を向ける必要がある。これはつまり、話し手が一人称代名詞を理解するのと同様の過程が生じているということである。ただし、それだけでは「あなた」とは「あなたにとってのあなた(相手の相手)」であるということになり、話し手にとっての「私」と区別がつかなくなってしまう。このことを理解するために、太郎が話し手、花子が聞き手である状況を考えてみよう。

太郎は話し相手である花子を「あなた」によって指示することができる。花子にとって花子自身は直接的な観察の対象ではないために、話し手である太郎の概念化を参照し、そこにおける客体である花子自身へと注意を向ける必要がある。しかしこの際、花子が自身の視座(のみ)から、太郎によって概念化された花子を捉えた場合には、その対象は「あなた」ではなく「私」になってしまう。花子は花子である以上、花子の視座の原点はかならず花子自身である。このような視座のあり方は「あなた」を理解する場合であっても変わらない。聞き手が二人称代名詞を理解するためには、聞き手にとっての主体である自身と、話し手にとっての客体である自身を、1つの対象として重ね合わせて捉える必要がある。つまり、聞き手は聞き手としての視座を維持しながらも、同時に話し手の視座にも立つ必要があるのである⁹。もしそうでないなら、「あなた」を理解するのは話し手(太郎)だけになってしまうだろう。

ここまでの議論で、一人称代名詞・二人称代名詞の意味はかなりの程度明らかになったものと思われる。しかしながら、ここにはまだ検討すべき点が残されている。それは、話し手・聞き手である主体は誰なのかという問題である。これは、話し手・聞き手はどのような人物かという問ではない。そもそも誰が話し手・聞き手なのかという問である。

5. 同定に先立つ現実性

一人称代名詞・二人称代名詞にかんする上述の分析は全て、(太郎や花子のような) 任意の主体に当てはまるものであった。ここでもう一度、話し手にとって、(概念化の主体としての自身を指示する) 一人称表現がどのような意味を持つのか確認しておきたい。話し手は、聞き手にとっての概念化の客体としての自身、すなわち「あなた」にとっての「あなた」という仕方で一人称代名詞を理解していたのであった。しかし、そのような把握が行われるためには、そもそも誰が聞き手の概念化を概念化する主体であるのかが定まっている必要がある。仮に聞き手にとっての概念化の客体である対象が得られたとしても、誰が話し手であるのかを予め知っていなければ、それを話し手である自身と重ね合わせて理解することはできないであろう¹⁰。これはつまり、「私は誰が私であるのかをどのようにして知なのか」という問である¹¹。

この問には二通りの答え方がある。一つは先に述べた「内容による同定」、すなわち「私は〇〇という名前であり、△△な容姿をしており、××高校出身であり……」という仕方で、自身を特定できるまで特徴を積み上げていくというものである。内容による同定は、私たちが他人を見分ける際にも用いているものである。しかし、別の答え方もある。それは、「現実にはそれしかない」というものである。これを「同定に先立つ現実性」と呼ぼう。同定に先立つ現実性について、初めから任意の主体に当てはまる説明を行うことはできないため、本稿の筆者(田中)に即して説明する¹²。

たとえば、私は私に見えるものしか見えない。これはこれまで偶然成立してきた事実の表明ではなく、何が見えようと、見えたからにはそれを見ているのは私であるという世界のあり方にかんする言明である。同じことであるが、他人がいくら殴られても痛みを感じないのは、痛みというのは、そもそも感じられたのであれば、それを感じているのは私であるというあり方をしているからである(他人の怪我を見て、ある種の痛みを感じる経験はありふれたものであるが、その際にも感じているのはあくまで私である)。このように私は、同定に先立つ現実性という基準によって、内容を問わず私であることになるために、同定の必要は初めからないのである(より正確に言えば、何らかの基準による同定は不可能だということである)。

同定に先立つ現実性を色濃く反映した一人称の使用として(8)が挙げられる。

(8) 私が二人に分裂した場合に、一方が私であればもう一方は私ではない。

最初の「私」は、主体として捉えられるとともに客体としても捉えられる、「私」の典型的事例である。一方で、下線部の「私」はそうではない。私の分裂が、内容の点では寸分たがわぬ私(内容的には田中である2つの個体)を生み出すとしよう。そのような場合、誰が私であるかを定める際に、内容による同定を用いることはできない。一方が話し手である田中と内容的に同一であれば、もう一方は内容的に同一ではないということが述べられているわけではないのである。ここでの主張はむしろ、内容的には田中である2つの個体の内、一方からなぜか世界が開けているならば、つまりそこから世界が見え、そこにだけ痛みが生じ……

というあり方をしているならば、もう一方の個体からは世界が開けていないという、同定に先立つ現実性にかんするものである。

6. 2つの基準の重なり合い

同定に先立つ現実性にかんする以上の記述に対しては、以下の2通りの応答が可能である。一つは、「同定に先立つ現実性は、この箇所を読んでいる私にこそあるのであり、筆者である田中にあるわけではない」というものであり、もう一つは「たしかに、誰であれ同定に先立つ現実性によって誰が私かを判別している」というものである。この2つは矛盾するようであるが（というより、実際に矛盾しているのでもあるが）、「私」という人称が成立するためにはどちらも妥当でなければならない¹³。

まず、同定に先立つ現実性が無ければ内容による同定は成立しない。同定に先立つ現実性によって、誰が私であるのかが、いわばいきなり定まらない限りは、内容による同定によってどのような特徴を有する主体を探せば良いのか分からないだろう。一方で、同定に先立つ現実性によって定まった「私」が公共的に流通する（すなわち、コミュニケーションにおいて理解可能になる）ためには、内容による同定を経由する必要がある。なぜなら、話し手による「私」という記号の使用を理解する聞き手にとっては、話し手は話し手にとって「私」であるに過ぎない一人の人間でもあるからであり、またそのことを通じて、同定に先立つ現実性が、内容を持つ一つの個体と結びつくからである。とはいえ、同定に先立つ現実性にかんする議論から明らかなように、「私」の意味はこのような「～にとって」という相対的關係のみによって成り立つものではない。「私」は、話し手にとって、「話し手にとって」という相対化では捉えられない仕方定まる唯一の主体をも指示するのである。これはつまり、(9)・

(10) のような、概念化の主体を概念化の客体としても捉える「私」は、同定に先立つ現実性を基準とした、ただ一人存在する主体と、他者から見た場合に内容による同定が可能な一人の人物が、重なり合うことによって成立しているということである。

(9) 私は学生です。

(10) 私は東京に住んでいます。

7. おわりに

本稿では、「内容による同定」と「同定に先立つ現実性」という2つの基準に注目し、一人称（表現）の意味を分析した。最後に、ここまでの議論を踏まえ、本稿で扱った「私」の用法を整理する。

(2)～(7)のような、概念化の主体以外を指す「私」の場合には、同定に先立つ現実性を有する主体は内容による同定に対して、基準としての内容を提供するが、自身は指示の対象にはならない。

(11) = (2) That's me in the middle of the top row. (Langacker 1985: 129)

(12) = (3) 上の列の真ん中が私です。

(13) = (4) In my next movie I play a double-agent. Both the CIA and the KGB are trying to kill me. (Langacker 1985: 129)

(14) = (5) 次の映画で演じる役は二重スパイなんだ。CIA と KGB の両方が私の命を狙っているんだよ。

(15) = (6) あっ、私が出てきた。

(16) = (7) 家に帰ったら、私がいたんです。

(8) における、「私」は同定に先立つ現実性のみを基準としており、内容による同定は（同定に先立つ現実性を有する主体であるという以外には）全く働いていない。

(17) = (8) 私が二人に分裂した場合に、一方が私であればもう一方は私ではない。

(9)・(10) のような、概念化の主体を指す「私」の場合には、同定に先立つ現実性を有する主体が同時に内容による同定の対象ともなっている。

(18) = (9) 私は学生です。

(19) = (10) 私は東京に住んでいます。

認知文法が分析対象としてきたのは、通常の一人称表現という、同定に先立つ現実性と内容による同定が組み合わさり、任意の主体という概念が成立した後の言語使用であるため、このような二面性に注意が払われてこなかった。しかしながら、ここまでの議論から明らかに、「私」の意味を精確に捉えるためには、2 つの基準をひとまずは切り分けた上で、その関係を掘り下げる必要があるだろう。

¹ 本稿では、議論の対象を単数表現に限定する。一人称複数の場合には、「内容による同定」を基準に指示された「私」を含む集団を表すというように考えたい。(a) は (2) ～ (7) における類の「私」を含む集団であり、(b) は (9)・(10) における類の「私」を含む集団である。

(8) のような、同定に先立つ現実性という基準にもつぱら依拠した使用は、一人称複数には存在しないように思われる。

(a) 写真の中央が私たちです。

(b) 私たちは学生です。

² 認知文法の全体像については、Langacker (2008, 2017 など) を参照されたい。

³ もちろん、この過程に反省的意識が伴うこともある。しかしそれはもはや、ただ「ペットボトルを見る」という行為ではなく、「ペットボトルを見るという行為を反省的に認識する」という行為である。この点については、Langacker (1997: 1 節) を参照されたい。

⁴ とはいえ、主体がこのような見えのあり方に慣れていくにつれて、水晶体の濁りは意識の中心から遠のき、もっぱら主体として捉えられるようになっていくと考えられる。

⁵ この点について Langacker (1985: 125) は、もし仮に感覚器官が主体(の身体)から遊離し、主体自身を観察することができるようになったとしても、当の感覚器官自体は観察の対象にはなり得ないと述べている。観察ということの性質上、どこまで行っても観察の対象とはなり得ない原点が残るのである。

⁶ さらにここには、5節で述べる「同定に先立つ現実性」もまた働いていなければならない。というのも、「同定に先立つ現実性」が無ければ、「内容による同定」を、どのような内容を手がかりとして行えば良いのかが分からないからである。

⁷ Langacker (1985: 143) では、話し手が自身の実際の視座から少し離れた位置に視座を仮構し、そこから実際の視座に立つ話し手自身を観察するという分析が提案されている。これは、以下で検討する Langacker (2007) による分析と矛盾するものではなく、むしろそれを基盤として、一般化を進めたものとして捉えられる。一般にコミュニケーションにおいては、話し手は聞き手の視座からの概念化を把握しているため、客体としての自分自身は聞き手から見た話し手という仕方で捉えられるのが典型的である。しかし、独り言を考えれば分かるように、言語使用の際に聞き手が常に存在するわけではない。そのような場合には、聞き手というありかたを話し手自身のものとは異なる視座というしかたで一般化し、その視座に立つことで自身を客体として把握しているわけである。

⁸ 以下では、話し手・聞き手、概念化の主体・概念化の客体に言及する際、潜在的な役割について補足することはしない。

⁹ 一つの発話が、複数の視座からの概念化を反映している例として、Langacker (1985) による次の例が挙げられる。母親が子供を嗜めるためにこのように発話した場合、*your* は話し手である母親自身の視座からの概念化を、*mother* は聞き手である子供の視座からの概念化を反映している。

(c) Don't lie to your mother! (Langacker 1985: 127)

¹⁰ さらに言えば、このような知識を欠いた状態では、誰が聞き手なのか分からないため、聞き手にとっての概念化の客体である対象が得られた場合にも、それが「聞き手にとっての概念化の客体である対象」という意味のもとで捉えられることはないはずである。

¹¹ 以下の議論は、永井均 (2016, 2018, 2022 など) による一連の議論から強く影響を受けている。

¹² 任意の主体に当てはまる説明はたとえば、「どの主体にとっても、その主体から現実の世界が開けている」というものとなる。しかしこれでは、ここで問題にするべき、そのような「現実世界が開けている」主体の内、どれが現実世界に「現実世界が開けている」主体なのかという論点には全く迫ることができない。

¹³ (8) と同様の内容は、(d) のように二人称についても述べることができる。

(d) あなたが二人に分裂した場合に、一方があなたであればもう一方はあなたではない。

同定に先立つ現実性があるまで私(田中)にしかないとするならばこれは奇妙な言明である。つまり、あなたが二人に分裂した場合には、どちらも単にあなたと内容的に等しい人物であるだけで、どちらか一方があなたであるなどという事実は存在しないように思われるのである(あなたが夜眠っている間に一度消滅し、全く同じ場所に、消滅したあなたと内容的に全く同じ人物が出現した場合に、私(というより、あなた以外のすべての人)は、その消滅には全く気づかずに生活をするだろう(さらにいえば、あなたの消滅後に現れたその人ですから、消滅の事実になどまったく気づかずに、あなたとして生活をするだろう))。しかしながら、私は (d) を (8) に相当する事態があなたに起こったものとして有意味に理解できる。これは、「同定に先立つ現実性」が、「同定に先立つ現実性という内容による同定」として読み替えられるからである。そもそも、読者であるあなたが (8) を理解できるのもそのためである(私が分裂したところで、読者にとっては両方ただの田中でしかないのであれば、(8) は全く意味不明だろう)。同定に先立つ現実性とは、このような読み替えの運動を成立させるとともに、その運動を通じて内容へと読み替えられることによって、もともとのあり方が伝達不可能になるものである(伝達不可能であるにも関わらず理解可能なのは、同定に先立つ現実性が、そもそもそれしかないという、内容に依存しないあり方をしているためである)。

参考文献

- Langacker, Ronald W. (1985) Observations and speculations on subjectivity. John Haiman (ed.), *Iconicity in syntax*, 109-150. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Langacker, Roland W. (1997) Consciousness, construal, and subjectivity. Maxim I. Stamenov (ed.), *Language structure, discourse and the access to consciousness*, 49-75. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2017) Cognitive grammar. Barbara Dancygier (ed.), *The Cambridge handbook of cognitive linguistics*, 262-283. Cambridge: Cambridge University Press.
- 永井均 (2016) 『存在と時間 哲学探究 1』東京：文藝春秋.
- 永井均 (2018) 『世界の独在論的存在構造 哲学探究 2』東京：春秋社.
- 永井均 (2022) 『独在性の矛は超越論的構成の盾を貫きうるか 哲学探究 3』東京：春秋社.
- 大森荘蔵 (1982) 『新視覚新論』東京：東京大学出版会. [大森荘蔵 (2021) 『新視覚新論』講談社.]
- Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking our minds*, New York: Palgrave MacMillan. [畔上耕介・石塚政行・田中太一・中澤恒子・西村義樹・山泉実 (訳) 『なぜヒトだけが言葉を話せるのか』東京：東京大学出版会. 2021]